

## 「今鏡」における「たまはり給ふ」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2011-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川岸, 敬子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/10934">http://hdl.handle.net/10291/10934</a>

# 「今鏡」における「たまはり給ふ」

川 岸 敬 子

## はじめに

院政期に成立した「今鏡」の「たまはる」に次の用例がある。

例 同じ后と申せど、やむごとくなくをします。久しく内へ参らせ給はざりける頃、内より、

あやめ草かけし袂のねをたえてさらに恋ぢにまどふ頃かな

と侍けむ。御返は忘れ侍にけり。東宮にをしまし、時の御息所に、この御堂の六の君参り給て、内侍督と聞へ給し、後冷泉院の今の東宮にをしまし、うみ置きたてまつりて失せ給にしかば、この宮は、其後参り給へるなり。故内侍督の御もとも、「霞のうちに思ふ心を」と詠ませ給ける御歌、給給たまひけると聞侍しものを。(一七頁一六行)

右は、『今鏡本文及び総索引』(1)の本文篇による。(ただし、一部句読点を改めた。)凡例によると、本文は畠山本

であり、表記は「直ちに畠山本の原文に復元出来るやうにした。」ということなので、傍線部の原文は「給たまひけると」ということになる。これは影印本<sup>②</sup>(第二帖六ウ一)でも確認できる。この「給」を総索引では「たまはる」の項に入れており、傍線部を「たまはりたまひけると」と読んでいることがわかる。「と」で引用される文を(後朱雀天皇ガ)故内侍督の御もとにも「御歌たまはりたまひける」と見て、「たまはる」を尊敬語、「たまはりたまふ」を二重敬語とすることは出来る。

畠山本を活字化した新訂増補国史大系『今鏡』を底本とする『今鏡全釈』も「賜はり給ひけると<sup>③</sup>」と読み(原文が「給たまひけると」であることが記されている。)、<sup>④</sup>「さし上げられた」と、与える意の口語訳を付している。

また、慶安三年(一六五〇)刊行の『続世継』を底本とした『今鏡』も「賜はり給ひけると<sup>⑤</sup>」と読み、「お贈りなされた」と、尊敬語の現代語訳を付している。この『今鏡』は表記を原文に復元できないようだが、国立国会図書館蔵本<sup>⑥</sup>によって見ると、「たまはり給ひけると」(第一 十九ウ一〇)となっている。

しかし、「故内侍督の御もとにも」の「に」を動作の目標・到達点でなく、動作の場所を表すものとしたらば、「故内侍督の御もとでも、後朱雀天皇がくとお詠みになった御歌をいただきなされた」と、「たまはる」を謙譲語として解釈することが出来る。「たまはる」は本来謙譲語なので、この方が自然なようにも思われるが、敬語史の観点から見て尊敬語の可能性はないのだろうか。また、そもそも「給たまひ」を「たまはりたまひ」と読んでよいのだろうか。これらの問題について検討したい。テキストは『今鏡本文及び総索引』である。

## 一 尊敬語の「たまはる」

小久保崇明氏は八巻本「大鏡」に尊敬語の「たまはる」の用例があることを指摘され、尊敬語「たまはる」の発生についての諸説を挙げられている。<sup>(8)</sup>氏は、それらを踏まえた上で、

尊敬語の「給はる」の発生は、『平家物語』の頃であろうか。<sup>(9)</sup>ともあれ、八巻本『大鏡』に、尊敬語「給はる」と思しき使用例があるのは、注目してよい。

なお、千葉本系の『大鏡』諸本には、(略)と「たまふ」とあつて、「給はる」とはない。これなら、全く問題はない。<sup>(10)</sup>

と述べられている。氏が、

八巻本『大鏡』は、流布本系に属し、その成立は、「<sup>(11)</sup>少くとも平安末期までさかのぼることができる」。しかしながら、言われるように、寛永の末ごろまでに整版されたもので、語彙・語法から見ると、後世的用法が散見され、善本である千葉本系の諸本より、かなり劣っているようである。<sup>(12)</sup>

と述べられていることから、八巻本「大鏡」の尊敬語「たまはる」は、この敬語の早い時期の用例というわけではないようである。

『日本国語大辞典 第二版』<sup>(13)</sup>の「たまわる」の項では「(中世以降の用法)物などをくれるの意の尊敬語。くださる。たばる。たもうる。たもる。」として、建保七年(一一二九)成立の「たまきはる」(底本は乾元二年八一三〇三二)

「今鏡」における「たまはり給ふ」

貞頭奥書金沢文庫蔵本)の用例を挙げている。

五節(せち)の所々へつかはすついでに、候(さぶら)ふかぎりの人々に薰物(たきもの)大きにまろがして、衣篋(ころもばこ)のふたに人のかずにしたがひておきならべて給はる

これが尊敬語の「たまはる」の初出例として挙げられているので、早くて「たまきはる」成立の鎌倉時代前期までに、遅くて底本書写の鎌倉時代末期までに、尊敬語の「たまはる」が現れていたことになる。

「今鏡」で、尊敬語の「たまはる」と読み得るのは、天皇を使用対象とする問題の一例のみであり、「たまふ」を伴っている。島山本は「列帖装の榊型本で、全二十三帖から成る。付属の古筆了佐の極書によれば、最初の一帖は転法輪三条公教の筆とあり、室町時代の補写であるが、残り二十二帖は鎌倉時代中期の書写といわれ、現存最古の完本である。」<sup>(11)</sup>とされる。「給たまひけると」は第二帖にある。すなわちこの箇所には鎌倉時代中期までの敬語が用いられている可能性がある。

鎌倉時代前期成立の「たまきはる」に尊敬語「たまはる」の初出例があることから、島山本「今鏡」に尊敬語「たまはる」があることを認めることは、無理ではないと考えられる。しかし、数十年の間に「たまふ」を付加するほど敬意の度合いが低下したのであろうか。ここで考えたいのは、鎌倉時代において尊敬語に「たまふ」を付加する現象が見られることである。

小久保崇明氏は、鎌倉時代中期を下らない写本である専修寺蔵本「水鏡」に「あそぼし給ふ」が一例あることを指摘されている。<sup>(12)</sup>また、近衛甲本「大鏡」に「きこし給ふ」(言ウ意)一例、「奉り給ふ」(乗ル・着ル意)二例が見ら

れることに関連して「為手尊敬の動詞に、為手尊敬の補助動詞『給ふ』の添う現象の現出するのは、院政期をまたねばならず、『鎌倉時代に一夥しく出て来る』ものである。」<sup>(13)</sup>と述べられている。「今鏡」の「たまはりたまふ」は、この現象が、鎌倉時代に生じた尊敬語「たまはる」にまで波及したと見れば、説明がつくであろう。

なお、「今鏡」には最高敬語「たまはず」が九例(確例)ある。いずれも地の文の用例で、使用対象は天皇・院五例、后一例、関白二例、大臣一例である。

例 師走の四日には、入道殿かくれさせ給ぬれば、年もかはりて春の初の節会などもとゞまりて、位など賜はする事も、程過ぎてぞ侍りける。(一四頁三行)

例 式部大輔永範、夢に見たてまつりたる<sup>例</sup>とて、詩三つ作りて賜はせたる中に、(略)と作らせ給へりけると見て、和して奉らむとしける程に、驚きにけり。(一三〇頁一行)

にもかかわらず、あえて尊敬の二重敬語「たまはりたまふ」を天皇に用いたとすれば、それはこの部分が「と聞侍しものを」で引用されており、話し手の口吻を写したものである(可能性がある)ことによるのであろうか。

## 二 「今鏡」の「たまはる」の表記

一において、問題の箇所は、敬語史との関係で尊敬の二重敬語の可能性があると言えることを述べたが、二と三において「給」の表記について確認したい。「給たまひ」を「たまはりたまひ」と読むということは、「たまはり」を

「今鏡」における「たまはり給ふ」

「給」で表記していることを認めることである。まずこれが適切かどうか検討しよう。

「今鏡」の、他の「たまはる」、すなわち謙讓語の「たまはる」二九例は、次のように表記されている。

給はる(一六) 給る(一) 給(二)  
たまはる(一) 賜る(六) 賜はる(三)

つまり、謙讓語の「たまはる」を「給」で表記した、そしてそれが認められる用例が二例ある。

例 (略) 年老ひたる女房の、「あれは御腹のそこなはせ給へるを、御法の蔵とは侍ものを」と申ければ、「さもいはれたる事、さもあらむ」とて、まなの御あはせどもとのえて、たてまつり侍ければ、「材木給て、やぶれたる宝蔵つくるひ侍ぬ」とぞ聞ゑ給ける。(二六二頁六行)

例 十月に大内造り出して渡らせ給。殿や門などの額は、閑白殿書ゝせ給。宮造りたる国司など七十二人とか、位給けり。(七七頁七行) \*総索引では「たまふ」の例となっている。海野氏は「位給はりけり<sup>(14)</sup>」竹鼻氏は「位賜はり<sup>(15)</sup>」と読んでいる。

このことから、尊敬語の「たまはり」に「給」を用いて、「たまはりたまひ」を「給たまひ」と表記していることは認めてよいと思われる。だが、謙讓語の「たまはる」が「たまふ」に接続する時は、「給はり給ふ」「給はり給ふ<sup>(14)</sup>」のように、読みを「たまはり」と確定し得る表記をしている。

例 (略) すみぞめなりければ、人くあやしく思えりけるに、昔給はり給へりける御文どもを、色紙にすきて、御

法の料紙となされたりけるなりけり。(二五七頁一二行)

例 同じき五年七月廿三日、女御と聞へ給て、四位の御位給はり給。(五一頁九行)

例 堀川の院位に即かせ給ひし日、摂政にならせ給ひ、同じき四年、内舎人の隨身給はり給ふ。(一一一頁一二行)

この事實は、尊敬語の「たまはりたまひ」が「給たまひ」と表記されたことをいささかためらわせるものである。ただ、謙讓語を用いた「たまはりたまふ」と尊敬語の「たまはりたまふ」の「たまはり」の表記が同じである必要もないように思われるし、見方を変えれば、尊敬語の「たまはりたまふ」であるが故に、謙讓語を用いた「たまはりたまふ」とは異なる表記になったと考えることも出来る。そうであるならば、これはむしろ積極的に捉えてよいのかもしれない。

### 三 「たぶ」の可能性

「給たまひ」の「給」を「たまはり」以外の語として読む可能性を探る。

「たまひ」では同語を繰り返すことになってしまう。「たび」はどうだろうか。『延慶本平家物語 本文篇<sup>(16)</sup>』には「たびたまふ」が一例見られる。



例 「程フレバ時ノ程モオボツカナク思進候ニ、念ギ帰参テム」ト申ケレバ、母上オキ上リ給テ、昨日ヨリ流ル、涙ニ御目モクレテ、筆ノ立所モノコハカト無レドモ、只思フ心計ヲコマぐト書給テ、斉藤六ニタビ給ヘバ、ヤガテ走帰ニケリ。(下四八六頁六行)

このように「たぶ」であれば、「二重敬語の「たびたまふ」の用例があるので、「今鏡」の「給たまひ」も「たびたまひ」の可能性が高いように思われる。

「今鏡」の「たぶ」の確例は、

例 長元二年三月四日、花の宴せさせ給て、「歌の師は鶯にしかず」とかいふ題賜びて、桂折る心みありと聞え侍き。

(二〇頁一六行)

例 その中に、六条の右の大臣の中納言と聞ゑ給し折、その若君胡飲酒舞ひ給。御前に召して、御衣賜ぶに、祖父の内大臣とてをはせし、座を立ちて押し給けるは、土御門のおととぞ聞ゑ給し。(二八頁八行)

例 さて院より御使ありて、(略)とて、美濃ノ国とかや、御莊の券奉らせ給へりければ、参りつかまつる男女、これかれ望みけれど、みゆき告げきこゑける隨身に預け賜びけるとぞ聞ゑはべりし。(二一〇頁八行)

の三例である。使用対象は天皇二例と后一例である。『日本国語大辞典 第二版(上)』「たぶ」の項の「語誌」には「平安時代になると、与える者と与えられる者との身分差が極めて大きい場合に用いられており、タマフが行為者を尊敬する方向に意味が働くのに対し、タブは受け手を卑める方向に働くようになる。」とある。

「今鏡」の「たぶ」三例の与える者と与えられる者を見ると、「後朱雀天皇↓学生」（後冷泉天皇↓中納言の若君）「小野の後↓隨身」である。第二例の与えられる者が後の太政大臣雅実であり、地の文において「たまふ」で待遇されているのが気になるが、当時は「若君」であることを考えると、三例いずれも、与える天皇または后と、与えられる者との身分差が大きいと言いうことが出来る。

これに対し、「給たまひ」の用例は、「後朱雀天皇↓内侍督」である。この内侍督は天皇の東宮時代に御息所になった、御堂（道長）の六の君であり、後冷泉天皇の母であることから、与える後朱雀天皇との身分差は比較的小さい。右のことから「給たまひ」が「たびたまひ」である可能性はむしろ低いと言つてよい。「たまはりたまひ」であると考えてよいのではないだろうか。

#### 四 他作品の「たまはりたまふ」

ここで、その後の鏡物を見てみると、応永書写の蓬左文庫本を本文の底本とした『水鏡本文及び総索引』<sup>(18)</sup>にも、学習院大学付属図書館所蔵の室町時代古写本を底本とした、日本古典文学大系『増鏡』<sup>(19)</sup>にも、尊敬語「たまはりたまふ」の用例はない。「増鏡」の次の例を見てみよう。

例 この入道殿の御弟に、其比、右大臣実雄ときこゆる、姫君あまたもち給へる中に、すぐれたるをらうたき物に思しかしづく。今上の女御代に出給べきを、やがてそのついで、文応元年、入内あるべくおぼしをきてたり。院にも御気色たまはり給。(三一 九頁九行)

「今鏡」における「たまはり給ふ」

「御気色たまはり給」について、頭注では「この入内をお許しになるお気持ちをお示しになった。」と口語訳し、「たまはり給」を院を主語とする尊敬語と見ている。しかし、「気色賜はる」は「気色取る」の謙讓語で、「意中を承る。御意を伺う。」の意であると、『古語大辞典<sup>(20)</sup>』「けしき」の項にもある。「右大臣は院にも御意を伺いなさった。」で十分意味が通じるのであり、この「たまはり」は謙讓語と言うことが出来る。

そのほか、ほぼ鎌倉時代中期までの成立とされる「愚管抄」「保元物語」「平治物語」「平家物語」「閑居友」「今物語」「宇治拾遺物語」「撰集抄」「十訓抄」「古今著聞集」「唐物語」「建礼門院右京大夫集」「弁内侍日記」「海道記」「東関紀行」<sup>(21)</sup>にも尊敬語「たまはりたまふ」の用例は見られない。<sup>(22)</sup>

これらの点からは、「今鏡」に尊敬の二重敬語「たまはりたまふ」を認めることに疑問が残る。

## おわりに

畠山本「今鏡」の「給たまひ」を尊敬の「たまはりたまひ」と読むことについて、尊敬語「たまはる」の発生時期、「たまふ」付加の現象、「たまはる」の「給」表記の妥当性、「給」を「たび」と読む可能性、などの点から検討したところでは、敬語史の面からも、表記の面からも可能性のあることが明らかになった。しかし見た限りでは、他の作品に尊敬の「たまはりたまふ」は用いられていない。

これらのことから、畠山本「今鏡」の「給たまひ」は尊敬の二重敬語「たまはりたまひ」の可能性を有するが、鎌倉時代中期までの確例が認められるまでは、「はじめに」で述べたような謙讓語「たまはる」により解釈しておくのが

穩当であると考える。

注

- (1) 榊原邦彦ほか編『今鏡本文及び総索引』（笠間書院 一九八四年）
- (2) 日本古典文学影印叢刊『今鏡 上』（財団法人日本古典文学会 一九八六年）
- (3) 海野泰男著『今鏡全釈（上・下）』（復刻版（パルトス社 一九九六年） 上五四頁七行
- (4) 竹鼻績全訳注『今鏡 上』（講談社学術文庫 一九八四年）一〇一頁三行
- (5) 刊記は「慶安三年孟春仲旬 中野道伴刊行」である。
- (6) 小久保崇明著『水鏡とその周辺の語彙・語法』（笠間書院 二〇〇七年）四一二頁
- (7) 小久保氏は『御衣たまはり給へりしを』小考―『たまはる』について―（『語文』第六九輯 一九八七年十二月）においても、「たまはる」について「尊敬語即ち為手尊敬語の用例が顕現するようになるのは、中世に入ってからとみるのが自然である」と述べられている。
- (8) (6) 同書四一三頁
- (9) (6) 同書三九八頁 「」内は松村博司『歴史物語 改訂版』（塙書房 一九七九年）一三九頁からの引用。
- (10) 日本国語大辞典第二版編集委員会ほか編『日本国語大辞典 第二版』第八卷（小学館 二〇〇一年）
- (11) (4) 同書（下）解説六二二頁
- (12) (6) 同書四四頁
- (13) 小久保崇明著『大鏡の語法の研究 続』（桜楓社 一九七七年）五六頁 『』内は根来司「鎌倉時代の文語における『給ふ』

「今鏡」における「たまはり給ふ」

『国語と国文学』一九六二年一月)からの引用。根来氏はこの種のものとして、擬古物語などの「つかはし給ふ」「おぼし給ふ」を挙げられている。

- (14) (3) 同書上三二四頁二行
- (15) (4) 同書上四七〇頁二行
- (16) 北原保雄ほか編『延慶本平家物語 本文篇上・下』(勉誠社 一九九〇年) 検索は同索引篇(一九九六年)による。
- (17) (10) 同書
- (18) 榊原邦彦編『水鏡本文及び総索引』(笠間書院 一九九〇年)
- (19) 岩佐正ほか校注『神皇正統記 増鏡』(日本古典文学大系 岩波書店 一九六五年) 検索は、門屋和雄編『増鏡総索引』(明治書院 一九七八年)による。
- (20) 中田祝夫ほか編『古語大辞典』(小学館 一九八三年)
- (21) 岡見正雄ほか校注『愚管抄』(日本古典文学大系 岩波書店 一九六七年)・永積安明ほか校注『保元物語 平治物語』(日本古典文学大系 岩波書店 一九六一年)・坂詰力治ほか編『保元物語総索引』(武蔵野書院 一九八一年)・坂詰力治ほか編『平治物語総索引』(武蔵野書院 一九七九年)・(16) 同書・峰岸明ほか編『閑居友本文及び総索引』(笠間書院 一九七四年)・三木紀人全訳注『今物語』(講談社学術文庫 一九九八年)・渡辺綱也ほか校注『宇治拾遺物語』(日本古典文学大系 岩波書店 一九六〇年)・増田繁夫ほか編『宇治拾遺物語総索引』(清文堂 一九七五年)・安田孝子ほか編『撰集抄自立語索引』(笠間書院 二〇〇一年)・泉基博編『十訓抄本文と索引』(笠間書院 一九八二年)・永積安明ほか校注『古今著聞集』(日本古典文学大系 岩波書店 一九六六年)・有賀嘉寿子編『古今著聞集総索引』(笠間書院 二〇〇二年)・池田利夫編『唐物語校本及び総索引』(笠間書院 一九七五年)・井狩正司編著『建礼門院右京大夫集校本及び総索引』(笠間書院 一九六九年)・新編日本古

典文学全集『中世日記紀行集』（小学館 一九九四年）の中の岩佐美代子校注・訳「弁内侍日記」・江口正弘編『海道記語彙及び漢字索引』（笠間書院 一九七九年）・熊本女子大学国語学研究室編『東関紀行本文及び総索引』（笠間書院 一九七七年）

(22) 伊奈恒一氏は『たまはる』および同系語について（その二）『語文』第十四輯 一九六三年一月）において、氏が尊敬語と見る、平安時代中期以降の「たまはる」の用例を挙げられているが、鎌倉時代中期までの尊敬語「たまはりたまふ」の確例はないようである。伊奈氏の説については小久保崇明氏の論（7）がある。

（かわぎし・けいこ 商学部教授）